

「昔話における異界観」

―日欧の昔話AT480を比較して―

細 谷 瑞 枝

『こどもと家庭のためのメルヘン集』（以下KHMと記す）24番「ホレおばさん」と日本の昔話「地蔵浄土」は、「主人公が（地下の）異郷へ行き、そこでもてなされ、良い贈り物を得て帰る。主人公の模倣者は、同じく異郷へ行くが失敗し害を受ける」という構造において一致し、ともにアールネ・トムソンの「昔話の型」480番（以下AT480と記す）「泉のそばで糸を紡ぐ女たち。親切な少女と不親切な少女」に分類される。しかし、継母に虐げられた少女が井戸に飛び込み、地底で異界の存在に出会う話と、善良な爺が転がる豆などを追いかけて地底に行き、地蔵や鬼に会うという話は外観においてかなり異なる。話の構造を骨格とすると、主人公の属性や小道具、エピソードの組み合わせはその肉づけとなる部分であり、そこに文化的特徴を見て取ることができよう。

本稿では、最初に「ホレおばさん」をはじめとするヨーロッパのAT480の昔話、次に「地蔵浄土」を中心にAT480に分類される日本の昔話をとりあげ、そこで異界がどのように捉えられているか、その特徴について考察する。

1. 「ホレおばさん」

最初にKHM1857年版の「ホレおばさん」の筋を確認しよう。

美しくて働き者の継娘と醜くて怠け者の実の娘。継娘は、継母に言われて、落とし糸巻き棒を取るために井戸に飛び込む。気がつくと、そこは美しい花が咲く草原で、道すがら娘はパン焼きがまに請われて焼きあがったパンをとり出し、同じように熟したリンゴの実を木から落としてやる。ホレおばさんの家にたどりついた娘は、そこにとどまり家事をきちんとこなし、幸せに暮らす。しばらくすると家に帰りたくなる。ホレは娘を見送り、それまでの勤勉さの報酬に金の雨を降らせ、それを浴びた娘は全身が金で覆われる。

継娘の話聞いて羨んだ継母は、実の娘にも同じことをさせる。しかし、怠け者の娘は、パン焼きがまとリンゴの木の願いをはねつけ、ホレの家でも怠惰に暮らし、ホレに愛想をつかさ、金の代わりにピッチの雨を浴びてそれが生涯落ちなくなる。

グリムの昔話が版を重ねるごとに「教育的」に変えられていったことはしばしば指摘され、「ホレおばさん」においても初版と1857年版では若干の教育的配慮が見られるが¹、それはこの話においてはわずかであって、話の中核をなすメッセージは初版から一貫して「働き者のよい子は報われ、怠け者にはそれ相応の報いがある」ということである。そし

て、その裁定をなす存在が「ホレおばさん」なのであるが、同じグリム兄弟の『ドイツ伝説集』によれば、ホレは人間にとってありがたくも恐ろしくもありうる二面性を備えた「地母神」的存在であり²、勤勉な者に報酬を、怠惰な者に懲罰を与えるにはまさに適役である。ホレが地母神であることを念頭に置けば、パン焼きがまやリンゴの木が娘に出す不思議な要求は、豊饒と勤勉の組み合わせから生じたものと考えられる。つまり、指から血が出るまで糸を紡ぐような働き者である娘は、井戸の底に広がる異郷で実りを尊ぶ気持ちを行動で示し、さらにホレの家での家事全般、とくに羽根布団の手入れを誠実に行うことによって、全身が金に覆われるという褒美を与えられるが、怠け者の娘はまさにその反対になるのである。

全体にグリムの「ホレおばさん」は善悪の区別が極めて明確でわかりやすい構成になっており、ホレはその善悪を裁く存在である。

2. ヨーロッパのAT480タイプの昔話

2-1 AT480の基本構造

では、ヨーロッパの類話に目を転じたい。その前にAT480の基本構造をRöthに基づいて訳出しておく。³

I 愛されていない継娘が地下の世界に到達する。

- a) 井戸に落ちる（落とされて）
- b) 不運、災難によって
- c) （転がっていく）ものを追跡することによって
- d) 実現できない任務（雪の中に苓を探すなど）によって
- e) その他の方法によって

II 彼女は途中でリンゴの木、牝牛、パン焼きがまなどの手助けをし、異郷の存在のところへたどり着く。彼女はそこで奉仕する（家事、虱取りなど）、あるいは困難な課題を果たす。彼女が親切にしてやった動物が助言、あるいは手助けをしてくれる。

報酬：すばらしいものとひどいもの（ドレス、小箱など）の選択。見劣りのするものを謙虚に選び、良い方を手に入れる。贈り物をもらい、美しくなって（口または髪から真珠、金の雨など）帰郷する。雄鶏または犬が到着を告げる。

III 羨んだ義理の姉妹がもっと多くを手に入れようとする。高慢にも彼女は同じ道を行くが、不親切で、従順でない。彼女はすばらしいものを選ぶが、手に入れるのはひどいもの。

罰：口からヒキガエルが出る、ピッチの雨など。

IV 美しい（裕福な）継娘は王子と結婚し、ひどい娘は貧しい男と結婚するか、（自分

1 たとえば、初版には全くない「指から血が出るまで糸を紡ぐ」という描写、リンゴの実を落としたあときちんと積み重ねる、ホレの羽布団を「羽が雪のように舞うまで」振るなど、継娘のまじめさが強調され、娘の里心がホレの気に入るという一文など、子供のあるべき姿に近づけられている。

2 『ドイツ伝説集』4～8番参照。

3 Röth, Dieter: Kleines Typenverzeichnis der europäischen Zauber- und Novellenmärchen, erweiterte zweite Auflage, Baltmannsweiler, 2004, S.89

の箱から出てきた火によって) 死ぬ。

Uther編集の『Europäische Märchen und Sagen』にはATU 0480として20話が収録されているが、本稿では「ホレおばさん」を含む19話を考察の対象とし、別表にあらすじをまとめた。⁴

2-2 登場人物の属性

主人公と模倣者の関係は義理の姉妹というのが12話で最も多いが、実の姉妹、きょうだい、従妹、近所の子どもの場合もあり、子どもであれば、性別、血縁の有無を問わず主人公とその模倣者になりうる。

また、「ホレおばさん」のホレにあたる異界の中心的存在（以後便宜上「異界の主」^{ぬし}または単に「主」^{ぬし}とする）も、聖母、魔女、老婆、と女性であることが多いものの、老人、子どもたち、竜や悪魔、と多岐にわたっている。

2-3 類話のバリエーション

話の筋をみると、①～③は基本的には同じ話で、聖母マリアなど聖なる存在がこどもたちの思いやりや親切心を試し、結果に応じて天国や地獄へと振り分けるというもので、キリスト教色が極めて強い。ここでは男女のこどもは一緒に出かけ、同時に試されるため純粋な意味での「模倣」という要素はない。また、森の中で迷うということは特に記されていない。

この3話以外は、いずれも「まず主人公が異界の主と出会い、よい贈り物をもらって帰る。次に模倣者が同じことをするが、惨めな結果に終わる」という二部構成になっている。⑤と⑥を除けば、主人公が、たいていは継母に、だが時には実母や実父からも厭われて虐待されている点も共通である。泉に水を汲みに行く、落とした糸車を取るために井戸に飛び込む、家から追い出される、と形は違っても、主人公は自分から進んで異界への道をたどるのではなく、継母をはじめとする他者からの直接的あるいは間接的な強制によって異界と遭遇することになる。

その遭遇の場が通常の現実界であるかの印象を与えるのが④と⑤である。というのは、泉は主人公が日頃から水を汲みに行かされている場であり、まねをする者もごく普通にそこへ行けるからである。一般に昔話の中では、水が湧き出る泉や井戸は異界につながる場所とされている。異界と現実界の境の場に異界の者が現実界の者を装って現れ、主人公らの親切心を試すことが話の中心になっている点は①～③の話と近く、違いは「模倣」の要素の有無である。

これ以外の13話では、主人公は森の奥に迷い込んだり、井戸の底に広がる草原を歩いて異界の主の住処にたどりついたりするように、境界を踏み越え、異界の奥まで進んでいく。その途中、またはたどりついた先で、主人公と模倣者はその人間性を試される。具体的に

4 Uther, Hans-Jörg(hrsg.): Europäische Märchen und Sagen [Elektronische Ressource], Berlin, 2004

なお、残る一話、「ジョバンニーノとカテリーナ」（イタリア）は、義理の姉妹、継母による不可能な課題と異界の存在の援助という共通性はあるが、姉妹の模倣に当たるモチーフが欠如しているため、比較対象外とした。

は、「ホレおばさん」の主人公のようにリンゴの木やパン焼きがま、動物たちの頼みごとを親切にきいてやるかどうか、異界の主のために入浴の準備をする、虱をとるといった何らかのつらい課題を快く引き受けるか、提示されたもののなかから慎ましいものを選ぶ謙虚さを持ち合わせているかどうか、などである。いずれの場合も、行いのよい娘には良い贈りものと幸せな生活が、悪い娘にはひどい贈り物と悲惨な暮らし、もしくは死が授けられる。いわば「勧善懲悪」、「因果応報」という昔話の王道を行く話とみてよい。

ただし、⑬、⑭、⑮の話には「善因善果」とはいきれない面もある。主人公が、禁じられた部屋に入り、金を盗んで逃走したり、相手が悪魔だとはいえ豪華な衣装一式をだましとったりするからである。

以上に明らかになったヨーロッパの昔話に共通する特徴を整理しておく。

- ① 主人公は、継母など他者の意向で異界へと赴くことになる。
- ② 主人公は、異界において親切な行ないや礼儀正しさ、勤勉さ、謙虚さなどの報いとして富や幸せを授かる。
- ③ 模倣者は、主人公とは反対に、不親切な行ない、無礼さ、怠慢などの報いとして悲惨な罰を受ける。

2-4 異界の存在

これらの話の異界には、「ホレおばさん」の「ホレ」にあたる「異界の主」だけが登場する場合と、パン焼きがまやリンゴの木、牝牛などの動物、子どもたちなども登場する場合がある。便宜上、本稿では後者を「異界の主以外の存在」、「主以外の存在」と呼ぶことにする。

話の中に「主」しか登場しない場合（①～⑩）、主人公たちを試し、その結果に基づいて運命を決定するのはもちろん「主」であり、報酬も懲罰も「主」の力によって与えられる。

「主以外の存在」が登場する場合は、それが「主」と同一の場にいる話（⑪～⑬）と、別の場にいる話（⑭～⑮）に分けられる。前者においては、「主以外の存在」は、「主」の従者のような位置づけで、主人公らの運命を決めるのは依然として「主」の方である。

一方、「異界の主以外の存在」が「主」とは異なる場所にいる場合、「主以外の存在」は「主」より先に主人公らと会い、頼みごとをする。すべての話で主人公はその頼みを親切に聞いてやるが、模倣者は拒絶する。その後、⑭と⑮の主人公は「主」の出す課題もきちんと成し遂げて幸せになるが、模倣者は「主」の課題を雑に終え、結局は不幸になる。この二話においては、「異界の主」と「主以外の存在」は、別の場所にいても主人公には好意的、模倣者には敵対的と同一の態度を取る。

ところが、⑯と⑰では、「異界の主」と「主以外の存在」が主人公に対し相対する立場になる。それは、この二話にだけ「逃走」というモチーフが存在しているからである。

主人公は、魔女または老婆が入室を禁じた部屋に入り、そこで全身を金に覆われて恐ろしくなり（⑯）、または、その部屋に金の袋を見つけそれを盗んで（⑰）逃げることになる。禁を犯し逃走するという意味では主人公の娘の行為は悪である。しかし、彼女は往路でリンゴの木や動物の願いをかなえてやっており、いわば人間性のテストにパスしているので、「異界の主以外の存在」から援助が与えられる。同じように禁を犯し、いったんは成功したかに見えた模倣者の娘が結局援助を得られず、不幸な結果に終わることからも、こ

の二話において人間の運命を決定する力を持っているのは、魔女や老婆ではなく、リンゴの木などの方であるといえよう。ただし、このように異界の存在が「主人公に対して敵対者（魔女、老婆）と援助者（リンゴの木、動物たち）に分かれる」のは18話中2話とごく限られている。そこで、この点は留保しつつ、次の点をヨーロッパの話の特徴に加えたい。

- ④ 異界の中心的存在（「異界の主」）は単独で現れることが多い。「主以外の存在」が登場する場合も、多くは「主」と立場を同じくし、信賞必罰で主人公らに処する。「主」と「主以外」が主人公に対して敵と味方という異なる立場に立つことはごくまれである。

3. 「地藏浄土」とその類話

3-1 「地藏浄土」の基本構造

「地藏浄土」は日本全国に広く分布するが、ここでは『日本昔話大成』に収録された山形県新庄市の話のあらすじを紹介する。⁵

爺が土間を掃いていると、落ちていた団子がついてくるように言って、土間の穴に転がって入る。爺がついていくと、穴の中の明るい所に地藏が立っていて団子を半分食べてしまったという。地藏は、しばらくすると鬼が来て博打をするので、鶏のまねをして鬼が逃げたら銭を持って帰るように勧めて、爺に自分の頭の上に乗るようにいう。爺は遠慮するが、結局上る。博打が盛り上がったところで、地藏のいうとおりに鶏のまねをし、残されたたくさんの銭を持って帰る。

隣の婆が話を聞き、爺と一緒に土間を探すと団子が落ちていて、土間の隅の穴に落ちる。爺がついていくと、地藏はいるが何も言わない。隣の爺は地藏の頭に勝手に上がり、鬼が来ていくらもたたないうちに鶏のまねをする。鬼は逃げだすが、そのうちの一人が鼻を鉤に引っ掛けたようすがおかしくて爺は笑ってしまう。笑い声を聞きつけた鬼に見つかり、つかまって喰われてしまう。婆は泣きながら待つ。だから、人まねをするものではない。

関敬吾によると、「地藏浄土」の基本構造は以下の通りである。

- I 爺が団子（豆、握り飯）を取り落とすと穴の中に転げていく。
- II あとを追っていくと地藏がいてそれを食っている。
- III 地藏はそのお礼を約束する。
- IV 爺が地藏の後ろ（天井）に隠れていると鬼が来て博打を打ちまたは金を分ける。
- V 爺は地藏に教えられ鶏の鳴きまねをする。
- VI a 爺はその金または宝を持ち帰る。
b 鬼の飯炊きになり宝物の杓子を持って帰る。
- VII a 隣の爺がまねて失敗する。
b 殺される。

4 関敬吾：『日本昔話大成 第4巻本格昔話三』（再版）角川書店 1985年 78—82頁

3-2 登場人物の属性

「地藏浄土」は「隣の爺」型の話であり、主人公と模倣者は、隣同士の老夫婦で、それぞれの家の爺の方が異界へ行く話が多いが、婆の場合もある。また、話が継子譚の「栗拾い」と同じように始まる場合は、義理の姉妹と一緒に栗拾いに出されるが、穴のあいた袋を持たされた継子はいつまでも栗を集められず、日が暮れて地藏堂にたどりつくという形になり、主人公と模倣者はヨーロッパの昔話に多い義理の姉妹になる。

異界の存在に関しては、「地藏」と「鬼」の二手に分かれることが圧倒的に多く、地藏に替えて「かみさま」や「大黒さま」、「鬼」の代わりに「ネズミ」、「博打うち」になるものもごく少数あるが、いずれの場合も前者が後者に対して上位にあり、主人公らとの関係において「ホレ」にあたるのは前者である。ただし、地藏が登場しないで主人公が直接鬼から宝物（米が増える不思議な杓など）を自分の才覚で盗んで逃げる話、逆に鬼は登場しないで地藏が直接宝を爺に与える話も少数だが存在する。

3-3 類話の構造

日本の昔話でAT480に分類されるものには「地藏浄土」のほかに、上述した「栗拾い」がある。「栗拾い」本来の話形では後半、継娘は地藏堂ではなく、山奥の人食い・鬼などの家にたどり着く。そこで老婆や鬼の妻などの女性にかくまってもらい、土産に栗や宝物をもらって帰り、まねをした実子は失敗する。登場人物が母親と実子・継子の姉妹であること、継子は継母の意思で栗を拾いに行かされる点において、この話形とヨーロッパの話との類似性はより高い。しかし、異界についてから継子と実子が人間性を試されるモチーフはほとんどなく⁶、あえて実子の性格の非を探せば、栗が集まらない継子を山の中において自分は帰ってしまうことだが、なかには自分の栗を義理の姉（妹）に分けてやろうとしたり、一度は一緒に帰ろうと誘う者もいるし、継子の性格の長所にしても愚直なまでのまじめさ（栗を袋いっぱい集めるまで帰らない）くらいであって、ヨーロッパの話ほど姉妹の性格は対照的ではない。

「栗拾い」においても異界の存在は、老婆と鬼のように娘たちにとって味方と敵の二手に別れる。「地藏浄土」と違うのは、力の弱い老婆の方が「話を聞けばかわいそうだから」⁷とかくまってくれることであり、援助の眼目は土産の宝よりも異界から無事に帰還することのほうにある印象を受ける。

更なるAT480タイプとして「鼠浄土」が挙げられる。「おむすびころりん」の名で親しまれているこの話は、穴に転がり落ちた握り飯のお礼にと、主人公の爺がネズミ^{すみか}の住処に招かれて歓待され、土産をもらって家に帰るが、それをまねた隣の爺は宝を全部持ち帰ろうと欲を出しネコの鳴きまねをしたためにネズミたちは逃げ、あたりが暗くなって出口が分からなくなり、失敗するという話である。この話における異界の存在はネズミだけであるが、握り飯のお礼として主人公を歓待するのはネズミであっても、欲深い爺に対して罰を与えるのはネズミとは考えられない。この意味で、ネズミは「異界の主」的存在ではあ

6 継子は虱を取っているときに婆の頭に角があるのを見つけて震えているが、実子は汚いといっぱを吐きかける高知県の話、自分で焚いた粥の水の部分で自分が食べる継子と焚かせて米の部分を食べる実子の岐阜県の話、重いつづらと軽いつづらの選択がある石川県の話の三話。

7 関 敬吾：『日本昔話大成 第5巻本格昔話四』（四版）角川書店 1984年 221頁

るが、その力は絶対ではない。

では、「栗拾い」と「鼠浄土」を視野に入れつつ、ヨーロッパの話と比較しながら「地藏浄土」の特徴について考察していく。

まず、たまたま土間に転がった団子を追いかけるところから話が始まるように、「栗拾い」の例外があるとはいえ、「異界への出立が偶然である」ことが日本の話の基本的なパターンである。しかも爺は自分の意思で、団子の後を追いかけて（「地藏浄土」）、握り飯を穴へ次々に入れたりしている（「鼠浄土」）。あるいは、団子が後についてくるように言ったり、ネズミがお礼をするから自分たちの家へ来てほしいと迎えに来る話もある。この点が、井戸に落ちた糸巻きを自分で取りに行く以外の選択肢はなかったヨーロッパの娘の場合と大きく異なる。爺は団子をそのままにしておくこともできたのに自ら進んで、あるいは招かれて、異界へと足を踏み入れるのである。

次に、問題にしたいのは、主人公の爺が異界で財宝を手にしたのはなぜなのか、という点である。

「隣の爺」タイプの話は、「正直者のいいおじいさん」と「欲張りのわるいおじいさん」と相場が決まっているので、「地藏浄土」についても主人公が財宝を手に入れ、模倣者が酷い目にあうことに違和感はない。確かに、主人公は、団子を食べられてしまったことに腹を立てるでもなく（地藏が黙って食べてしまうのではなく、爺が土で汚れた部分は自分で食べ、きれいな方を地藏に差し出す話も多い）、地藏の上によじ登ることを恐れ多いと躊躇する善人である。しかし、ヨーロッパの娘たちの場合とは異なり、親切さや謙虚さが何らかの具体的な行動や試練で改めて試されるわけではない。それどころか、地藏に教えられたからというものの、爺は鬼の財宝を盗んでしまう⁸。なぜかといえば、この鬼の財宝が地藏に食べられた団子に対する代償になるからである。つまり、爺に果報が与えられるのは、何らかの善行の結果なのではなく、団子のお礼という意味合いが強い。その団子にしても、爺は意識的に地藏に供えたわけではないので信心深さに対する褒美ともいえない。深読みをすれば、団子が転がったのは偶然ではなく、爺を異界へと誘うことが地藏の本意だったのかもしれない。

逆に、隣の爺はなぜひどい目に逢わねばならなかったのだろうか。隣の爺の悪いと思われる行動の主なものをあげてみる。ただし、すべての行動が一つの話の中に出てくるとは限らない。

- ① 団子をわざと穴にころがす。
- ② 地藏に無理に団子を食べさせる。
- ③ 地藏に土で汚れた部分を食べさせ、自分はきれいな部分を食べる。
- ④ 地藏に勧められもしないのに、頭の上などに登る。
- ⑤ 地藏の合図もないのに（早めに）鶏の鳴きまねをする。
- ⑥ 鶏の鳴きまねをするが下手。
- ⑦ 鶏の鳴きまねに驚いて逃げていく鬼の滑稽な姿を笑う。

8 ヨーロッパの娘たちの課題が「親切にすること」、「勤勉に働くこと」であるのに対し、爺の課題は「鬼を上手にだますこと」という見方もできる。

⑧ 鬼を脅すことばを言いまちがえる。

こうしてみると、「悪」といえるのは③と④くらいで、行動全般に「無理に」「わざと」といった強引さが目立つものの、せっかち、下手な鳴きまね、言いまちがいなどは本来「悪」とはいえないだろう。にもかかわらず、隣の爺が話によっては死という重い罰まで受けるのは、先に挙げた山形県の話にあるように、欲に駆られた人まねを強く戒めるため、とひとまずは捉えておこう。

日本の話の場合、模倣者の行動や性格が対照的に描かれることはあっても、それは人間性を試すテストではなく、主人公と模倣者の運命の分かける決定的な決め手にはならない。まとめると、日本の話の特徴は以下になる。

- ① 主人公は偶然に異界に赴くことになる。
- ② 主人公が、異界から財宝を得るのは、異界の存在からのお礼としてである。
- ③ 模倣者は、欲をだして主人公をまねたために悲惨な目にあう。

3-4 異界の存在

異界の存在に関して「地藏浄土」の構成がヨーロッパの昔話と大きく異なるのは、「地藏」と「鬼」という二つの相対する表象がほとんどの話に登場する点である。地藏は人間を守ってくれるありがたい仏、鬼は人間に害を及ぼす恐ろしい妖怪であって、明らかに人間にとって善と悪の存在である。鶏の鳴きまねをせよと地藏が爺に言うのは、異界は時間的な領域でもあるからで、朝が来れば異界の存在である鬼は立ち去らねばならないからである。そのことを知っている地藏はこの世（現実界）とあの世（異界）の境にいて衆生を守る存在であり、地藏は鬼より上位にある。つまり、ここでの「異界の主」は地藏である。

しかし、地藏のほうが鬼より上とは決められない微妙さがこの話にはある。人間にとって価値ある財宝を持っているのは地藏ではなく鬼だからである。地藏は団子の恩義を鬼の宝で返そうとするが、地藏が鬼から直接財宝を取り上げるのではなく、爺は地藏に言われたことを自分で実践しなければならない。ヨーロッパの「異界の主」は、主人公らの行いを試し、運命を定め、自ら褒賞や懲罰を授けるが、地藏は人間に助言をするだけで、運命を決定する、裁くという役割は果たしていない。

もう一方の鬼は、人間を見つけると酷い目にあわせる「危険」な存在であり、同時に人間にとって価値ある「宝」を持っている。それは、鬼に対する人間の側がよい爺であろうとわるい爺であろうと変わらない。この意味で鬼は異界の絶対的な表象、人間にとっての「異界」そのものである。

換言すると、鬼は異界という世界を人格化したものである。異界そのものは「鬼」に表象されるように危険極まりなく、かつ価値ある何か（宝）を有しているが、人間がその宝を獲得するためには、完全に異界の側にいるのではなく、異界との境にいて人間の側についてくれる地藏の力添えが必要なのである。模倣者の爺の不幸な運命は、地藏が下した「罰」というよりも、地藏の援助もなしに鬼に挑んだがための「失敗」という印象が強い。つまり、「地藏」は、主人公らを「裁く」のではなく、「援助する」存在なのであって、運命そのものは人間の行い次第なのである。日本のAT480タイプの昔話における異界の存在については次のことが言えよう。

- ④ 異界には、「地藏」と「鬼」の二者が登場する。前者は人間を援助する存在、後

者は危険であると同時に価値の所有者であり、ともに人間を裁く存在ではない。

4. 異界観の比較

最後に、これまでの分析に基づいて、日本とヨーロッパを比較しながら、AT480タイプの話における異界のとらえ方について善悪という観点から考察する。

前節で明らかにしたように、日本の地蔵は人間を援助するのだが、援助を授ける際の基準が善悪であるとは一概にいけない。3－3で確認してきたように、「地蔵浄土」主人公の爺はもちろん悪人ではないが、全くの正直者でもない。この印象は、「鼠浄土」の異型を読むとさらに強まる。現在広く知られている「おむすびころりん」の筋に従えば、「鼠浄土」は典型的な勧善懲悪の話である。ところが、『日本昔話大成』の「鼠浄土」の項には、主人公の爺が誰に教わったのでもなくネコの鳴きまねをして首尾よく餅や宝を持ち帰ったところで終わる話や、隣の爺が二番煎じでネコの鳴きまねをしてネズミにつかまり主人公の分まで酷い目に合う話が西日本を中心に全国で多数採録されている。こうなると、「鼠浄土」の主人公はネズミという異界の存在から宝をまさしくだましとってくることになり、地蔵の後ろ盾がないだけにこの主人公が「善い」爺であるとはいいがたい。

一方、模倣者は「欲に駆られた人まね」のために悲惨な目にあうとしてきたが、主人公もネコの鳴きまねをしてネズミの宝を奪うのであるのであれば、「欲」ではなくて「人まね」のほうが不幸の主原因になる。「人まね」のモチーフはヨーロッパの話にもあるが、そこではさらに人間性を試す何らかの課題があるので、主人公と模倣者の運命の差は納得のゆくものに感じられる。ところが、日本の場合は「まね」そのものが戒められているわけである。

では、隣の爺は何をまねたのだろうか。もちろん、主人公の行動のすべてだが、ここでは主人公が偶然に導かれて異界に足を踏み入れたという点が重要なのではないだろうか。主人公は確かに善人の部類ではあるが、爺が異界に行ったのは偶然でしかない。地蔵が招いたのかもしれないが、なぜなのかはよく分からない。しかし、だからこそ、偶然という招きもないのに異界に押し入ると、地蔵の援助は望めず、鬼の餌食になってしまう。偶然をまねることは、悪ではなく、不可能なのである。

日本の話の異界は、地蔵と鬼の二元的に構成されていて、概ね前者は善、後者は悪であり、人間の側も主人公と模倣者が善悪に分かれるが、その善悪は現実界のそれとは必ずしも一致しないし、ヨーロッパの話ほど両者が截然と分かれてもいない。この点にこそ日本の昔話における異界観が現れているのではないだろうか。すなわち、異界では現実界の倫理観がそのまま通用するわけではなく、異界から何らかの価値あるものを手に入れるためには、策略や盗みという奇策もとらざるを得ない。善の側に立つ地蔵自らがその策を授けることもあるのだから、それは認められてもいる。

しかし、策さえあれば必ず成功するのではなく、異界に相応の礼節が必要である。「地蔵浄土」のなかには、隣の爺が成功を目前にしながら、鶏の鳴きまねに驚いて逃げていく鬼の姿を笑ったために捕まってしまうという話がかかなりある。見つかる原因なら、恐怖のあまりの身震いや不注意で物音を立てしてしまう方が自然であろう。ところが、主人公の成功を既に知っている模倣者だからこそ、畏れてしかるべき鬼を見下して笑えるのであり、この思い上がりが失敗に直結するのである。

異界は確かに現実界とは異なる摂理に従っていて、その倫理観や秩序は人間には理解できないこともある。しかし、いったん異界に足を踏み入れたからには、異界のやり方に従い、畏敬の念を忘れてはならない。ましてや、招きもなくそこに立ち入ってはならない。それがこのタイプの昔話から読み取れる日本人の異界とのかかわり方である。

一方、ヨーロッパの話では、異界は招かれるどころか、行かされる場所である。もちろん、継母は主人公を森や井戸（の底）へ行かせたのであって、そこが異界へ通じていたこと自体は偶然である。しかし、継母、すなわち現実界側からの否定的な働きかけがなければ主人公が異界に出会うことはなかった。結果として主人公は価値あるものを異界で授けられるが、自ら進んで赴くところではないという点に異界への隔たりが感じられる。

異界では「異界の主」が一元的に支配しており、主人公らの人間性を何らかの形で試したのち、「主」が聖母マリアであろうと魔女であろうと一律に、「勤勉」、「親切」、「謙虚」には褒賞を、「怠惰」、「不親切」、「強欲」には懲罰を与える。すなわち、異界独特の基準ではなく、通常の現実界の倫理観に基づいて裁定がなされる。

ヨーロッパにも魔女が逃走する主人公らを追跡し、リンゴの木などが主人公の場合は援助するが、模倣者に対しては援助しないという話がわずかではあるが存在する。この場合、異界の存在が二手に分かれ、魔女は金という価値あるものを持っているが主人公と模倣者の双方にとって同じように危険な存在であり、リンゴの木などが援助の有無を決めるところまでは、「地藏浄土」の鬼と地藏の関係と一致する。しかし、その場合でも、主人公と模倣者の運命は、往路における主人公らの行いに応じて決められるのであり、「因果応報」、「勧善懲悪」の基準は揺るがない。つまり、ヨーロッパの異界の倫理観は、現実界のものと一致、もっと言えば現実界の秩序が異界にも持ち込まれているのである。⁹

総じて、日本の昔話は、現実界とは異なる異界のあり方をそのままに認めながらも、異界との接触は偶然や招待によるもので、異界に対する親近性を含有している。他方、ヨーロッパの話では、異界にも現実界の価値観が当てはまり理解は容易になっているが、異界訪問の契機が現実界での逆境にある点に異界への隔意が認められる。

注：

ヨーロッパ、および日本の昔話については以下のテキストを用いた。

Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Darmstadt 1983

Brüder Grimm: Deutsche Sage. München 1993

Uther, Hans-Jörg(hrsg.): Europäische Märchen und Sagen [Elektronische Ressource], Berlin, 2004

関 敬吾：『日本昔話大成 第4巻本格昔話三』（再版）角川書店 1985年

関 敬吾：『日本昔話大成 第5巻本格昔話四』（四版）角川書店 1984年

9 この点は、ヨーロッパの異類婚譚においてのみ、異類が実は魔法にかけられた人間であって、異類婚とはいえ実は人間同士の結婚になっていることとの類似性を感じさせて興味深い。

別表

タイトル	言語	あらすじ	異界の存在	主人公の性格	報酬・結果	模倣者の性格	結果
① 二つの小箱	チロル地方 のドイツ語	女の子と男の子が母の家に帰って帰る。出会った乞食の老人が金を取って帰る。女の子の箱からは天使が、男の子の箱からは悪魔が出てくる。	乞食のような 老小男	勇気、従順	天使の箱	臆病	悪魔の箱
② おねえちゃんとおにいちゃん	チロル地方 のドイツ語	よい子で信心深い女の子と強情で親に心配をかける悪い男の子のきょうだい。母の男の子は自分で食べるだけ、女の子は母親のために集める。王冠をかぶったきれいな女性（聖母）と会い、それぞれ金と黒の箱をもらう。黒の箱からは黒い大きな虫が出て男の子に巻きつき森の中へ連れ去る。女の子は男の子を心配しつつ家に帰り箱をあけると、天使が出てきて天国へ女の子を連れ去る。	きれいな女性 (聖母)	親孝行、敬虔、 畏敬の念	天国へ行く	強情、不眠、 自己中心的	行方不明
③ いい子のヤン・ヒェンと悪い子のミイケン	フラマン語	貧しいきょうだいのヤン・ヒェンとミイケンが薪拾いにいく。ヤン・ヒェンは途中で変装した聖母、キリストにパンを喜んであげる。ミイケンは拒む。白と黒の球。それぞれの行き着いた白、黒の門から天使と悪魔が出てきてヤン・ヒェンは天国へ、ミイケンは地獄へ。	貧しい女に変 装した聖母、 老人の姿のキ リスト	親切な行為	天国へ行く	不親切な行為	地獄へ行く
④ 妖精たち	フランス語	母の姉と父の妹。未亡人の母は妹を虐待。1日2回泉に水汲みに行かせる。ある日妹が貧しい女に化けた妖精に親切に水を飲ませると、話すごとに花と宝石が口から出るようになっていく。母親が姉にまねをさせる。失敗して蛇と蛙が出るようになる。妹のせいだとしてたたかれそうになり、森に逃げ王子と出会う結婚。姉は追い出されて森で野たれ死ぬ。	貧しい姿に変 装した妖精	親切な行為	花と宝石が口 から出る 王子との結婚	高慢と不親切	蛇と蛙が口 から出る 母親に家か ら追い出さ れて森で野 たれ死ぬ
⑤ クアドラー 二と妹	イタリア語	金持と貧しい姉妹の娘たち。貧しい妹の娘はきれいで親切で礼儀正しく、それと知らず水を7人の魔法使いに飲ませて、良い特質をあたえられる。姉の娘は不親切にして失敗。王さまと結婚するために城へ向かう船の中で、美しい娘は従妹に水中に落とされる。醜い娘は海へ入る替わることができ、幽閉される。美しい娘は海へ入る替わることができ、幽閉される。救出、王との結婚。姉の娘への報復。	普通の青年に 見える7人の 魔法使い	親切な行為	7つの特質、 王さまと結婚	不親切な行為、 すれ代わりのた めに殺人もいと わない	ばらばらに 切り刻まれ て塩漬けに される
⑥ 山の精	チロル地方 のドイツ語	いい子の娘が病気の母を助けるためにこけももを摘みに森に入って迷う。山の精の小人にあって薬草をもらい母は全快。金儲けを企んで真似をした隣の少年は薬草でおなかを壊し以後いい子になる。	小人(山の精)	親孝行	母親の病気を 治す薬草	うそ、金儲け	ひどい腹痛

タイトル	言語	あらすじ	果界の存在	主人公の性格	報酬・結果	模倣者の性格	結果
⑦ 森の中の聖 ヨーゼフ	ドイツ語	3人の実の姉妹。森に迷い込んだ末娘が聖ヨーゼフに親切にし(食べ物を大半譲る。ベッドを辞退する)袋一杯の金をもたう。真似をした姉たちはそれ相応の仕打ちを受ける。上の姉は食べ物をほとんど一人で食べ、ためらいなくベッドで眠る高慢さのゆえに鼻の上にもう一つ鼻。金は森でなくしたと見栄を張って、蛇、トカゲに食われる。(KHM 子どものための聖者伝1)	聖ヨーゼフ	親切、謙虚	金一袋	不親切、虚栄心	鼻に鼻がつく、蛇、トカゲに喰われる
⑧ ヴォゾと娘 たち	ウドムルト語 (ロシア連邦)	継母の誹謗によって実の父にまで嫌われた娘は廃屋に取り残される。祈りながらそこにいると、誰かがきれいな肩ひもをくれ、外に出してくれる。羨んだ継母は、嫌がる自分の娘を廃屋に連れていく。娘は両親の悪徳のためにヴォゾに内臓を引き出されて殺され、継母は強欲を後悔する。	誰か、ヴォゾ	祈りのほかは何になし	生きて帰る 美しい肩ひも	特になし	殺される
⑨ 2人の娘	フランス語	義姉妹。父は隣れむが継母が怖い。森に捨てに行く話を聞いた娘は名付け親の助言で灰を鞆につめて持って行き、帰り道を見つめる。麻の実でも成功するが、3度目にヒエで失敗。森で迷い大きな城にたどりつき、一晩泊る。翌朝女主人がドレスとアクセサリー、馬を選ばせる。控えめに選ぶが、最高のもので囃られる。帰路、に星が落ちてきて額と顎を飾る。王子に出会い、結婚。姉がまねをする。妹と逆のブレゼント。糞が落ちてきて、行き合った老人に結婚を強いられ、虐待される生活を送る。	城の女主人	謙虚、従順、敬虔、家族愛	ドレス、宝石、馬など価値ある贈り物 王子との結婚	強欲、不服従	意に沿わない結婚、虐待を受ける
⑩ 2人の娘	ウドムルト語 (ロシア連邦)	義理姉妹。前妻の娘は父親に森に置き去りにされ、小さな家になどり着く。その老婆に風呂の用意を命じられ、老婆のおかしな指示には従わず、きちんと準備する。翌朝老婆に言われた箱を持って赤玉のあとについて家に帰る。犬の告知。箱の中にお金がある。継母の実子がまねをし、老婆のおかしな指示通り無礼にふるまう。老婆に言われたように箱を持ってくる。箱の中から蛇と蛙が出てきて喰い殺される。	老婆	指図がおかしい時は、自分の判断できちんと入浴の準備をする	お金	指図がおかしいでも、そのとおりに行う。	蛇と蛙に喰い殺される
⑪ 井戸の中の 紡ぎ部屋	フランス語	義姉妹。外で糸を紡ぐように言われた妹。井戸の底が明るく少女たちが大勢いるのに驚き、紡錘を落とす。自ら飛びこむ。一人の少女の虱を礼儀をわきまえてとる。少女の母に話すごとに金貨が口からでるようになってしまう。真似をさせられた姉は、不躰なことを言ってしゃべると放屁するようになる。怒りのあまり母と姉は死に、妹は平和に暮らす。	少女たちと一人の少女の母親	善良、喜んで虱をとる 礼儀正しき	口から金貨が出る	がさつで悪い子、いやいや風 とり不躰	母ともども怒りのあまり死ぬ

タイトル	言語	あらすじ	異界の存在	主人公の性格	報酬・結果	模倣者の性格	結果
⑫ 金のペテリ と松やにバ ビー	スイスドイ ツ語	義姉妹。ペテリ（継娘）は糸巻きを追ってネズミの穴へ。見えない手に導かれるようにして異郷の豪華な城へたどりつく。犬が「金のペテリ」と吠える。子どもたちが出てきて、誰とどんな服を着て食事をするかの選択。謙虚な選択をするが、良い方を与えられる。金のドレス、アークセサリーと金の糸巻きを持ってネズミ穴から帰還。まねをさせられた妻の娘バビーは木の服を着て犬と食事し、松脂を塗られて古い木の糸巻きを持って帰還。	子どもたち、 犬	勤勉、従順、謙 虚	金のドレス、 アークセサリー と金の糸巻き 生涯「金のペ テリ」と呼ば れる名誉と名 声	高慢	「松やにバ ビー」と怪 蔑される
⑬ 因果応報	セルビア語	父親が留守の間に家から追い出された継娘。森で迷い、無人の小屋に行き着く。掃除をし火を焚き続ける。小屋の主は竜。その虫だらけで臭う頭をかきながら礼儀正しく振舞う。翌日動物の世話、数日後一番怪い靴を選んで帰宅。靴の中には金貨。実子はまねをして母ともども蛇に目を吸い取られる。	竜、野生の動 物	勤勉、礼儀正し さ、従順、謙虚	金貨	怠惰、不潔、不 服従、強欲	蛇に目を吸 い取られる
⑭ 継娘と本娘 の報い	エストニア 語	義姉妹。継娘は糸巻きを追って井戸へ自ら飛び込む。牛、雄羊、リンゴの木、パン焼き釜の頼みをきく。その後道端の風呂小屋に住む老人に会う。老人は入浴させてくれるように頼み、異常な指示を出す。娘はきちんと準備を整え入浴させる。報酬として金と宝石入りの箱。実の娘がまねる。糸車を見つけても先へ進み、牛たちの言うことは聞かず、老人の言うがままにぞんざいに仕事をす。箱の中には燃えている炭が入っていて家ごと一家全滅。義理の娘だけ助かる。	牛、雄羊、リ ンゴの木、パ ン焼き釜、老 人	動物などの言う ことをそのとお りしてやる 老人の指図がお かしい時は、自 分の判断できち んと入浴の準備 をする	金と宝石の 入った箱	動物の願いをき かない 老人の指図がお かしくて、そ のとおり行う	一家全滅
⑮ ヨーマはあ さんと2人 の娘	コミ語（ロ シア連邦）	継母の願いで父親が継娘を乾いた井戸へ放り込む。草地にいた馬たちをなでてやると助言をくれる。牛、羊たちも同様。ヨーマに言われたとおりに風呂の準備をすすと赤と青の箱の一つを選ばされる。動物の助言に従い青い箱を選ぶ。井戸のところで父親に引き上げてもらふ。箱の中身はドレス、金など。まねをする実の娘は、馬たちを虐待。赤い箱を取るようにとの助言をもらふ。風呂は指示通りではないが、準備する。箱の選択。赤い箱を選び、帰宅後箱から火が出て実子は焼け死ぬ。	馬、牛、羊た ち、ヨーマば あさん	動物をかわいが る ヨーマに言われ たようにきちん と風呂の準備を する	動物の助言に 従って選んだ 箱にドレスと 金	動物を虐待 風呂の準備が下 手	動物の助言 に従って選 んだ赤い箱 から火が出 て、母子と もに焼け死 ぬ

タイトル	言語	あらすじ	異界の存在	主人公の性格	報酬・結果	模倣者の性格	結果
⑯ 2人の娘と 魔女	トランシル バニア・ザ クセン方言	醜い実の娘（姉）と美しい義理の娘（妹）、妹は虐待され、家を追い出される。歩いているとリンゴの木、犬、かまどに出会い、それぞれに言われたとおりにしてやる。魔女の小屋につき、女中に雇ってもらう。好奇心を抑えきれず、禁じられた7番目の部屋に入ると、すべてが金で、娘自身も金色になる。怖くなってしまう。好意を寄せられ、娘自身が金色になる。哀れに思った老人が、魔女の前は夜、娘の前は昼にしてくれ、かまどたちに守ってもらって帰宅。姉娘がまねをする。リンゴの木などの願いは拒否。7番目の部屋に入り、全身金になるが、お仕置きに老人たちに逃走を妨害され、魔女につかまり金をはがされて血だらけになって帰宅。生涯地下室に隠れて暮らす。妹は王様に見染められて結婚。	リンゴの木、 犬、かまど、 魔女、老人	動物の言うことを聞いてやる	全身が金になる 動物たちが逃走の援助をする 王さまとの結婚	動物の頼みを拒絶	逃走を妨害され、金をはがされ全身血だらけになる 地下室に隠されてそこで一生暮らす
⑰ 小さなエールケと大きなエールケ	フリース語	小さなエールケは大きなエールケに言われるままに糸巻き卒を退って井戸へ飛び込む。緑の小道。リンゴの木、牝牛、パン焼き釜に頼まれて世話。木の小屋に住む老婆の面をとってやり、老婆が寝たすきに禁じられた7番目の部屋から金一袋を盗んで逃走。パン焼き釜などにも助けをもらい、井戸から地上へ。大きなエールケがまねをする。リンゴの木などの頼みは無視するが、老婆の小屋では同じ振る舞いをし、金の袋は全部盗み出す。リンゴの木などの協力が得られず、つかまつて引き裂かれる。	リンゴの木、 牝牛、パン焼 き釜、老婆	従順 盗みはするが、 節度あり	金一袋	リンゴの木などの頼みを無視	死
⑱ 父の娘と母の娘	ロシア語	父の娘は勤勉で、母の娘は怠惰。母の子が父の子の紡いだ糸を自分のものにして嘘をつく。妻に強いられて夫は娘を森に連れて行く。途中娘は泉の掃除、梨の木、犬の世話をする。夜、鶏の脚に立つ小屋に泊まると娘を欺いて父は一人で帰る。立派な男に変装した悪魔が踊りに誘いにきて、立派な衣装その他を用意してくれる。娘が連れてきた鶏が鳴いて、衣装はそのままに悪魔は逃げる。悪魔が残した馬車で帰ろうとするが、森で迷う。犬、梨、泉が助けてくれる。真似をする母の娘。泉などの世話はしてやらず、途中で見つけた鶏は料理して食べる。悪魔は娘の骨が崩れ落ちるまで踊り続ける。父の娘は領主と結婚する。	泉、梨の木、 犬、悪魔	勤勉、親切 機転が利く（悪魔相手に時間稼ぎをする）	装飾品一式 領主との結婚	嘘つき、怠惰、傲慢	命を落とす

参考文献

- Röth, Dieter: Kleines Typenverzeichnis der europäischen Zauber- und Novellenmärchen, erweiterte zweite Auflage, Baltmannsweiler, 2004.
Scherf, Walter :Märchenlexikon [Elektronische Ressource] / Berlin : Directmedia Publ., 2004.
Timm, Erika: Frau Holle, Frau Percht und verwandte Gestalten : 160 Jahre nach Jacob Grimm aus germanistischer Sicht betrachtet / Stuttgart, 2003.
網野善彦, 大西廣, 佐竹昭広編 『いまは昔 むかしは今』 福音館書店 1991
小澤俊夫編著 『昔話入門』 ぎょうせい 2003
小松和彦 『異界と日本人：絵物語の想像力』 角川書店 2003
小松和彦編 『日本人の異界観：異界の想像力の根源を探る』 せりか書房 2006

Das Bild der unirdischen Welt im Märchentyp AT480

— ein Vergleich der europäischen und japanischen Märchen —

Mizue Hosoya

Zum Märchentyp AT480 gehören die japanischen Märchen *Jizo Jodo (Elysium des Schutzgottes)*, *Nezumi Jodo (Elysium der Mäuse)* und *Kurihiro (Kastanien Sammeln)*. In dieser Abhandlung werden sie mit den europäischen Märchen AT480 wie KHM 24 „Frau Holle“ und anderen achtzehn Märchen aus verschiedenen Sprachgebieten verglichen, um zu veranschaulichen, wie man sich die unirdische Welt vorstellt und wie man damit umgeht.

In den europäischen Märchen gelangt die Hauptfigur zwangsweise in die unirdische Welt, und das unirdische Wesen, das meistens allein, aber auch mit Apfelbaum, Backofen, Kuh u.a. zusammen hervortritt, prüft, wie gut oder böse die Haupt- und Nebenfigur sind. Das unirdische Wesen belohnt die Hauptfigur für ihre Tugend wie Freundlichkeit und Bescheidenheit und bestraft die Nebenfigur für ihre Unfreundlichkeit und Habgier. In diesem Sinne gilt die irdische Moral auch in der unirdischen Welt.

Dagegen geht die Hauptfigur der japanischen Märchen freiwillig oder sogar eingeladen in die unirdische Welt, in der sie mit zwei unirdischen Wesen, einem Jizo (Schutzgott) und Oni (Teufel) begegnet. Zwar ist der Jizo gut und der Oni böse, wie die Hauptfigur ein guter Alter und die Nebenfigur ein böser Alter ist. Aber wenn man es genauer betrachtet, ist das Gute und Böse nicht so leicht zu unterscheiden. Aus Dankbarkeit für das Essen, das der Jizo ohne Erlaubnis der Hauptfigur gegessen hat, berät der gute Jizo der Hauptfigur, den Onis Geld zu stehlen. Die Nebenfigur, die neidisch die Hauptfigur nachahmt, erleidet einen miserablen Misserfolg, manchmal den Tod. In diesen japanischen Märchen wird das Verhalten der Figuren nicht getestet und der Grund, warum die Hauptfigur belohnt und die Nebenfigur bestraft wird, ist nicht überzeugend, und die unirdische Welt und deren Verlauf ist trotzdem mit Respekt zu akzeptieren.